

孟光故事の變容

——白居易の妻と北條政子——

桐島 薰子

はじめに

後漢の隱者梁鴻の妻孟光是、生涯夫の隱遁生活を支えた賢婦として知られ、その行跡は「荊釵布裙」「舉案齊眉」「椎髻布衣」の成語となつて傳えられている。ところが、嘗て筆者は、中國の中晚唐期に士大夫によつて「孟光」と稱賛された女性たちは、いずれも貴族社會から科擧出身者の臺頭する社會への移行期に、實際には隱者でない夫に嫁し、公的には夫の貴門門閥參入への橋渡しとなり、私的には官界の毀譽褒貶の中で挫折する夫を精神的に支えた、いわば唐代の新しいタイプの孟光たちであつたとし、代表的な例として白居易、元稹などの妻を挙げた。また、彼女たちが誕生した背景について、當時貴門大族の間で、孟光故事を典型的教材とした清貧の女子教育が行われていたのではないか、とも論じた。

一方、日本でも「荊妻」「荊室」といった熟語が使われていることから、孟光故事はいつ頃日本に入り定着したのかについて、その後、調査・分析を試みた所、孟光、或いはそれに關連した引用例は、『源氏物語』『唐物語』『蒙求和歌』『承久記』『十訓抄』にあること、孟光故事は平安中期には全く注目されず、平安末に引用された例も日本的

趣向により變質したものでしかなかったのに、鎌倉期になると俄に脚光を浴びて理想の妻像・武家社會の教訓的故事として引用され、その中には、源賴朝が、貴族社會から武家社會の移行期に潤滑油的役割を果たした妻北條政子の比喩として用いたとされる例があること、などが判つた。そして鎌倉期の孟光故事引用状況は中唐期のそれと類似しているように思われた。

また、管見によると、日本に於ける孟光故事の傳承について、日本文學方面の研究では『蒙求』と『後漢書』のみが重視され、『白氏文集』の影響に關する考察が脱落している部分があるが、その遺漏を補うと同故事の傳承過程は、太田次男氏の述べる、諷諭詩の根本精神は平安時代の攝關政治下では概ね適宜はぐらかされ武家の世になると、まともに顧みられるようになった、という説の具體的な一例といえるのではないかと考えるに至つた。以上、本稿は、中國と日本の孟光故事引用例を比較することで浮かび上がった兩國の類似性と、その背景について考察した一試論である。

一 唐代以前の引用傾向

唐代の孟光故事引用例を理解するためには、唐代以前の引用状況を

把握しておく必要がある。先ず、孟光傳記の原話ともいふべき南朝宋の范曄著「後漢書」「逸民傳」梁鴻傳に曰く、

梁鴻字伯鸞、扶風平陵人也。同縣孟氏有女。狀肥醜而黑、力舉石臼。擇對不嫁、至年三十。父母問其故。女曰、欲得賢如梁伯鸞者。鴻聞而聘之。女求作布衣麻屨、織作簪績之具、及嫁始以裝飾入門。七日而鴻不答。妻乃跪牀下請曰、竊聞夫子高義、簡斥數婦。妾亦僂養數夫矣。今而見擇、敢不請罪。鴻曰、吾欲裘褐之人、可與俱隱深山者爾。今乃衣綺縠傅粉墨、豈鴻所願哉。妻曰以觀夫子之志耳。妾自有隱居之服。乃更為椎髻著布衣。操作而前。鴻大喜曰此真梁鴻妻也。能奉我矣。字之曰德曜。名孟光。乃共入霸陵山中、以耕織爲業、詠詩書彈琴以自娛、仰慕前世高士、而爲四皓以來二十四人作頌。爲人質實、每歸妻爲具食、不敢於鴻前仰視、舉案齊眉。

梁鴻、字は伯鸞、扶風の平陵の人なり。同縣の孟氏に女有り。狀肥醜くして黒く、力は石臼を舉ぐ。對を擇んで嫁せず、年三十に至る。父母其の故を問う。女曰く、「賢なること梁伯鸞が如くなる者を得んと欲す」と。鴻聞いて之を聘す。女求めて布衣・麻屨・織作の簪・績績の具を作る。嫁するに及んで、始めは裝飾を以て門に入る。七日たつも鴻答えず。妻乃ち牀下に跪いて請いて曰く「竊かに夫子の高義あつて、數婦を簡斥すと聞く。妾も亦た數夫を僂養す。今にして擇ばる。敢えて罪を請わざらんや」と。鴻曰く「吾、裘褐の人の與に俱に深山に隱るべき者を欲するのみ。今、乃、綺縠を衣て粉墨を傅けたり。豈に鴻が願う所ならんや」と。妻曰く「以て夫子の志を觀るのみ。妾自より隱居の服有り」と。乃ち更へて椎髻を爲し布衣を著け、操作して前む。鴻大

いに喜んで曰く「此れ眞の梁鴻が妻なり。能く我に奉ぜよ」と。之に字して德曜と曰い、孟光と名づく。乃ち共に霸陵の山に入り、耕織を以て業と爲し、詩書を詠じ、琴を彈じ以て自ら娛しみ、仰いで前世の高士を慕う。而して四皓より以來二十四人の爲に頌を作る。人の爲に質實す。歸る毎に、妻爲に食を具するに、敢えて鴻が前にて仰視せず。案を舉ぐることに肩に齊しくす。傳を要約すると、孟光は肥えた醜い女性であつたが、德の高い梁鴻を慕つて結婚する。しかし、梁鴻に相手にされなかつたため、互いに數人の求婚者を斷つて結ばれたのに何故かと問ひ、その原因が婚禮の際の自分の華美な嫁入り支度だつたと知ると、質素な服裝に着替え、受け入れられた。その後は、夫と共に山中で隱遁生活を送り舉案齊眉の禮を盡くして仕えた、という。ここには、主に「隱者の妻」「質素で清貧に甘んじ夫を敬う妻」の要素が語られているといへよう。

ところで、孟光故事は、同時代に於いても既によく知られていたやうで、『後漢書』『列女傳』所收「袁隗妻」に引用されている。しかし、ここで引用されている孟光故事は、質素に甘んじる妻の部分だけが述べられている。具體的にいうと、それは、大儒者馬融の娘が袁隗と結婚する際、華美な婚禮支度を夫に責められ、孟光及び鮑宣の妻少君の行爲を見習ひ反省する、と詫びる場面である。袁隗は隱者ではなく、時の君に重んじられ出世した人物である。「袁隗妻」傳に曰く、

君若欲慕鮑宣梁鴻之高者、妾亦請從少君孟光之事矣。

君、若し、鮑宣・梁鴻の高き者を慕わんと欲せば、妾も亦た少君・孟光の事に從うを請う。

孟光と併稱された少君は、同書「列女傳」所收「鮑宣妻」傳によると、前漢哀帝の時、司隸校尉の官に昇つた鮑宣との婚禮の際、華美な

服装を夫に非難され、質素な短い木綿のスカートに變えた、という。傳に曰く、

装送資賄甚盛宜不悅。謂妻曰少君生富顯、習美飾而吾實貧賤不敢當禮。妻乃悉歸侍御、服飾更著短布裳。

装送、資賄、甚だ盛にして宜悦はず、妻に謂いて曰く「少君は富に生まれて驕り、美飾に習れたるも吾は實に貧賤にして敢えて禮に當らず」と。妻乃ち悉く侍御を歸えし、服飾は更えて短布の裳を着く。

このように、孟光は、『後漢書』の中で、「逸民傳」には「隱者の妻」「質素で清貧に甘んじ夫を敬う妻」が記録されているのに、「列女傳」には後者だけが強調して引用されている譯である。この點について、下見隆雄氏は、逸民梁鴻傳から孟光の話を切り離しては資料として獨立しえないので、「貧賤妻」に孟光の名を出すことによって彼女を「列女傳」中の女性として提示した撰者の判断があったと考えられること、更に、後漢時代は、妻の社會的役割が正式に意識あるものとして認識される一方、中央と地方・朝廷と地方權勢者をめぐる状況で、有能な社會的存在としての士人は、隱逸的な風貌ないし姿勢を持つことで世論の評価を高めようとする政治的ポーズをとる傾向があり、隱逸の妻も、この時代の士人の妻をシンボライズしたものである、と述べている。この下見説を加えると、孟光故事は、「出世のため隱逸を處世術とする士人の妻」という要素も含有していたことになる。

その後、貴族社會の魏晉南北朝時代は、以下六例のように、「隱者の妻」「質素で清貧に甘んじ夫を敬う妻」「出世のため隱逸を處世術とする士人の妻」の三要素を繼承しながら、夢の中の女性という幻想的

女性を喩えたものも出てくるなど、多様性を見せている。初めに『晉書』の「列女傳」序文には、

少君之從約禮、孟光之符隱志、既昭婦則。

少君の約禮に従い、孟光の隱志に符うは、既に婦則を昭かにす。と、質素儉約の士人の妻少君と並んで顯彰され、役割としては隱者の妻が強調されている。

第二に、同書「孝友傳」孫晷傳に、梁鴻夫婦に喩えられた夫婦の記録がある。

會稽虞喜隱居海嶼、有高世之風。晷欽其德、聘喜弟預女爲妻。喜成女棄華尙素、與晷同志。時人號爲梁鴻夫婦。

會稽の虞喜、海嶼に隱居し、高世の風有り。晷、其の德を欽いて、喜の弟預の女を聘し妻と爲す。喜、女に華を棄て素を尙ひ、晷と志を同じゅうせんことを戒む。時の人、梁鴻夫婦と號す。

孫晷の妻は、孫晷が敬った虞喜の姪に當たるが、同書「隱逸傳」任旭傳には、

旭與會稽虞喜俱以隱學被召。

旭と會稽の虞喜とは俱に隱學を以て召さる。

と、虞喜が「隱學」、即ち隱遁して學ぶことで任官したとあることから、「梁鴻夫婦」と稱された孫晷の妻も、出世のため隱逸を處世術とする士人の妻像に繋がるように思われる。

第三に、『宋書』「隱逸傳」朱百年傳では、隱者の妻の行跡が引用されている。

百年孝建元年卒山中、時年八十七。蔡興宗爲會稽太守、餉百年妻米百斛。百年妻遺婢詣郡門奉辭固讓、時人美之、以比梁鴻妻。

百年、孝建元年、山中に卒す。時に年八十七。蔡興宗、會稽の太

守と爲り、百年の妻に米百斛を餉す。百年の妻、婢を遣わし郡門に詣りて辭を奉じ固く譲らしむ。時の人、之を美とし、以て梁鴻の妻に比す。

第四に、『宋書』「孝武文穆王皇后傳」江表「離婚表」には、質素な婚禮及び妻の典型として用いられている。

年近將冠、皆已有室。荊釵布裙、足得成禮。

年將に冠せんとするに近く、皆已に室有り。荊釵布裙は、禮を成すに足り得たり。

第五に、『文選』卷五九所收、梁代任昉の「劉先生夫人墓誌」には、隱者老萊子の妻と竝んで賢婦の象徴として使われている。

既稱萊婦、亦曰鴻妻。

既に萊婦と稱し、亦た鴻妻と曰う。

第六に、『玉臺新詠』卷五所收、梁代沈約の「夢に美人を見る」詩には、それまでとは異質の非現實的な夢の美女の仕草として用いられている。

既薦巫山枕、

既に巫山の枕を薦め、

又牽齊眉食。

又た齊眉の食を牽ず。

二 唐代の孟光評と引用傾向

さて、唐代は科擧制度によって貴族以外も出世の門戸が開かれ、科擧出身者が政治や文學の面で活躍するようになる。彼らの私的生活の基礎は「家」で、その中核は「夫婦」であった。「唐律」では一夫一妻制が定まり、中饋（家務の總）を擔う妻が重んじられ、妻の在るべき姿が以前よりも一層意識された。そして、孟光故事は、官民擧げて婦徳の典型として認知され、廣く浸透していった。

五代後晉の劉昫らによる『舊唐書』の「列女傳」序文には、

梁鴻之妻、無辭僭禮、

梁鴻の妻は、僭に離するを辭する無く、

とあり、唐代の朝廷には孟光の美徳を顯彰する傾向があった、と考えられる。この序文には、他に、守節のため命を斷つ貞烈の美徳と二夫にまみえない共伯の妻の美徳の二つも擧げられている。ところが、續く各列女の傳を見ていくと、後者二つに該當する傳はあるのに、孟光の美徳に該當する列女だけが一例も見いだせないという懸隔が生じているのである。付け加えると『舊唐書』の他の記録にも孟光故事の引用例は見つからなかった。唐代に孟光故事を用いた例としては、實は、後述するように、當時の士大夫の時にしばしば引用されており、その内の多くは妻を孟光に喩えたものであった。

次に、民間に於ける孟光故事の浸透状況を知る資料としては、玄宗頃、李瀚が幼學書として撰した『蒙求』の標題「孟光荊釵」がある。司封員外郎李華は序文で、

列古人言行美惡、參之聲律以授幼童。隨而釋之。比其終始、則經史百家之要、十得其四五矣。推而引之、源而流之、易於誦誦、形於章句。不出卷知天下、其蒙求哉。

古人の言行美惡を列ね、之を聲律に參し、以て幼童に授け、隨つて之を釋く。其の終始を比するに、則ち經史百家の要、十に其の四五を得たり。推して之を引き、源ねて之を流む。誦誦に易くして、章句に形る。卷を出でずして天下を知るは、其れ蒙求なるかな。

と述べている。『蒙求』は上二字人名・下二字行狀の四字を二句ずつ對にした計五九六句から成り、當時より好評を博した。「荊釵」の語

は『後漢書』には無いが、國立故宮博物院藏上巻古鈔本の古注『蒙求』「孟光荆釵」李瀚自注には、

列女傳孟光、梁鴻妻。姿貌醜陋、德行甚脩。鄉里多求娶不肯。至年三十。父母、問所欲、對曰欲節操如梁鴻者。鴻因娶之。遂荆釵布裙與鴻隱霸陵山中。：每進食常舉案齊眉也。

列女傳にいう、孟光は梁鴻の妻なり。姿貌は醜いに醜なれど、德行は甚だ脩なり。郷里、娶らんことを求むる多けれども肯んぜず。年は三十に至る。父母、欲する所を問うに、對えて曰く「節操、梁鴻の如くなる者を欲す。」と。鴻因りて之を娶る。遂に荆釵布裙して鴻と霸陵山中に隱る。食を進む毎に舉案齊眉するなり。

とあり、質素な妻の身なりを象徵したものであった。『蒙求』で「荆釵」が使われた理由は、「滕公佳城、王果石廬、買妻恥醜、澤室犯齋。馬后大練、孟光荆釵、顧叔秉燭、宋弘不諧。」のように八句換韻（太字の韻は、全て上平聲九佳）を特徴とする『蒙求』の形式に都合がよかったことと、『後漢書』「后紀」の明德馬皇后傳を典故とする「馬后大練」（後漢明帝の馬皇后が荒絹のスカートをはいた故事）の對偶として適當であつたからであらう。ここで、孟光は、皇后に對し、いわば一般的士人の妻の代表として、少君故事の質素な妻像を擔つていたといえよう。

三 唐代女子教育の教材

唐代は、六朝以來の貴族政治から科舉出身者の影響力が高まる官僚政治への移行期、いわば二重構造が進む時期で、寮門出身者が任官榮達（任官榮達）の布石として貴門を憧憬する一方、貴門大族では新勢力の科舉出身

孟光故事の變遷

者を女婿にしようとする要望が高まった。しかし、當時は、結婚後、危うきこと累卵の如き政局を歩む女婿が挫折の憂き目に遭うことは回避したい世情であり、そのため、強靱な精神力で窮地を切り抜け復活への原動力となる妻になるよう愛娘に情實に甘んずる教育が行われ、孟光故事はその典型的な教材として用いられていた。中唐劉長卿の「李氏の子に別す」詩には次ぎのようにある。

念爾嫁猶近、

爾嫁すの猶に近きを念う、

稚年那別親、

稚年にして那んぞ親と別れん。

臨岐方教誨、

岐れに臨んで方に教誨す、

所貴和六姻、

貴とする所は、六姻と和すること。

俛首戴荆釵、

首を俛れて、荆釵を戴し、

欲拜湊且囑、

拜せんと欲して、湊且つ囑。

本來儒家子、

本來 儒家の子は、

莫恥梁鴻貧、

梁鴻の貧を恥ずること莫かれ。

漢川若可涉、

漢川若し涉るべくんば、

水清石磷磷、

水清く、石磷磷たらん。

天涯遠鄉婦、

天涯に遠郷の婦となり、

月下孤舟人、

月下に孤舟の人とならん。

この詩では、間もなく嫁ぐ娘が持つべき心構えが述べられているが、教えの主眼は、孟光の清貧に甘んじる精神で、最早、「儒家」の教えと明記されている。白居易「贈内」詩（題辭時・卷二）にも次のよう

生爲同室親、
死爲同穴廬。
他人尙相勉、

生きては同室の親と爲り、
死しては同穴の廬と爲らん。
他人すら尙お相勉む、

而況我與君。而るに況んや我と君とをや。
 黔婁固窮士。黔婁は固より窮士たるに、
 妻賢忘其貧。妻賢にして其の貧を忘る。
 冀缺一農夫。冀缺は一農夫たるに、
 妻敬儼如賓。妻敬すること儼として賓の如し。
 陶潛不營生。陶潛は生を營まずして、
 翟氏自蠶薪。翟氏は自ら蠶薪す。
 梁鴻不肯仕。梁鴻は仕うを肯んぜずして、
 孟光甘布裙。孟光は布裙に甘んず。
 君雖不讀書。君は書を讀まざれども、
 此事耳亦聞。此の事、耳亦た聞けり。

君家有貽訓。君の家は貽訓有りて、
 清白遺子孫。清白を子孫に遺す。
 我亦貞苦士。我も亦た貞苦の士にして、
 與君新結婚。君と新たに結婚す。
 庶保貧與素。庶わくは貧と素とを保ち、
 偕老同欣欣。偕老して共に欣欣たらん。

ここでは、白居易が妻楊氏に對し、歷代の隱者と其の妻を列擧し自分と結婚するに當たつての覺悟を促しており、更に、後述するように楊氏は望族でありながら、嫁ぎ行く娘に清貧の精神を訓育していたことが判る。

そして、詩全體は、第二句目の「同穴」と、最終句の「偕老」という、夫婦の生涯變わらぬ睦まじさを表す言葉で貫かれている。「同穴」は『詩經』「大車」(王風)、「偕老」は『詩經』「擊鼓」(邶風)を典故

とする。白居易は、型にはまった無味乾燥な教訓に夫婦の感情を吹き込んだのである。
 また、白居易は、「荊釵」を貧家の妻や娘を象徴するものとしても用いている。「青塚」詩(亂離詩・卷二)では、王昭君を憐れみながら、後世の女性に、

無辭插荊釵。辭すること無かれ荊釵を插み、
 嫁作貧家婦。嫁して貧家の婦と作るを。
 と訓じている。「秦中吟十首」の第一首「驕婚」詩(亂離詩・卷二)でも「荊釵」が貧家の娘の質素の象徴として引用されている。

貧爲時所棄、富爲時所趨。
 富は時の棄てらるる所と爲り、
 富は時の趨く所と爲る。

紅樓富家女、金縷繡羅襦。
 紅樓の富家の女は、
 金縷にて羅襦を縫す。

見人不斂手、嬌媚二八初。
 人を見るも、手を斂めず、
 嬌媚二八の初にして。

母兄未開口、已嫌不須臾。
 母兄、未だ口を開かずとも、
 已に嫌すこと須臾ならず。

綠窗貧家女、寂寞二十餘。
 綠窗の貧家の娘は、
 寂寞として二十餘。

荊釵不直錢、衣上無真珠。
 荊釵は錢に直らず、
 衣上に眞珠無し。

幾迴人欲聘、臨日又踟躕。
 幾迴か人聘せんと欲するも、
 日に臨みて又踟躕す。

主人會良媒、置酒滿玉壺。
 主人、良媒を會し、
 置酒、玉壺に滿つ。

四座且勿飲、四座且く飲む勿れ、

聽我歌兩途、我、兩途を歌うを聽け。

富家女易嫁、富家の女は嫁し易く、

嫁早輕其夫、嫁すること早ければ、其の夫を輕んず。

貧家女難嫁、貧家の女は嫁し難く、

嫁晚孝於姑、嫁すること晚ければ、姑に孝なり。

聞君欲娶婦、聞く、君婦を娶らんと欲すると、

娶婦意何如、婦を娶る意、何如と。

四 「孟光」と稱された女性たち

(白居易を中心に)

中唐になると、士大夫たちは妻を描き、或いは妻に寄せる作品を書くのに躊躇しなくなり、孟光故事の引用も目立って多くなったが、代表的な例は白居易であった。

白居易は、貞元年間に進士に合格、秘書省校書郎に任ぜられ、元和年間には翰林學士となり左拾遺へ昇進するが、後、江州司馬に左遷されるなどして、會昌の初めに刑部尚書を以て致仕した。白居易の結婚は、翰林學士となり左拾遺に任ぜられた元和三年(八〇八)と推定され、白居易は、白氏よりも大族楊氏の家柄の娘を娶るわけだが、以下のように、しばしば孟光に喩えている。

傳衣念襤褸、傳衣して襤褸を念ひ、

舉案笑糟糠、舉案して糟糠を笑う。

(元和九年「渭村に退居し、禮部の崔侍郎・翰林の饒舍人に寄する詩一百韻」卷十五)

來春更賣東廂屋、來春更に東廂の屋を賣き、

孟光故事の變容

紙闌蘆簾著孟光、紙闌蘆簾孟光を著けん。

(元和十二年「香爐峯下新たに山居を卜し、草堂初めて成る、偶たま東壁に題す」卷十六)

今宵始覺房櫳冷、今宵始めて覺ゆ、房櫳冷かなるを、

坐索寒衣詆孟光、坐に寒衣を索めて孟光を詆ぶ。

(元和十四年「冬至夜」卷十八)

素屏應居士、素屏は居士に應じ、

青衣侍孟光、衣は孟光に侍す。

夫妻老相對、夫妻老いて相對し、

各坐一繩牀、各々一繩牀に坐す。

(開成三年「三年除夜」卷三十六)

山妻未舉案、山妻未だ案を舉げず、

饑腹已先嘗、饑腹已に先づ嘗む。

徒訪五噫作、徒に五噫の作を訪り、

不解贈孟光、解せず孟光に贈るを。

(會昌二年「二年三月五日齋畢り案を開く。食に當たりて偶吟し裴弘農郡君に贈る」卷三十六)

これらの詩中の孟光は、閑適生活を送る夫の直接的な呼びかけや感情の吐露とともに日常の具體的な生活の中に讀み込まれ、現實世界の白居易の妻と完全なる融合を遂げている。

白居易は、同じく寒門から仕途を歩んだ元稹が妻韋氏へ贈った悼亡の詩に答え、

嫁得梁鴻六七年、梁鴻に嫁し得て六七年、

家貧忘却爲夫賢。 家貧うして忘却するは夫の賢爲るなり。

(元和四年「謝家最小偏憐の女に答う」卷十四)

といっている。元稹の妻韋氏は京兆の名族韋夏卿の末娘で、元稹も妻を孟光に喩えている。また、中唐から晩唐にかけ、仕途にある夫が妻を孟光に喩える詩が増えていった。

ここで、白居易が、前述の「贈内」詩を含め、孟光故事をこれ程多用した理由とその意味について考えておきたい。川合康三氏は、議論詩の兼濟に通じる公的性格と閑適詩の獨善に通じる私的性格とは、白居易の文學という全體の陽晝と陰晝の如き關係にあったのであり、また、白居易自身、獨善を自適の満足感としながら、なおかつそれを兼濟と同等の價值をもつものとして並び立てていた、と述べている。更に、姜若水氏は、「贈内」詩は白居易が裕福でない生活に甘んじてくられることを妻に要求する作品であるとともに當時の夫婦生活の様式として一種の普遍的な意義を持っていたこと、江州期以後の「閑適」生活で妻は缺かせない存在となり全面的に夫婦の生活や感情が文學の中で表現され幸せな家庭像が立體的に彫り上げられたが、そうした贈内詩の土壤となったのは「中隱」思想であつたであろうこと、などを指摘している。中隱とは、恐らく白居易の發明で仕と隱との中間として極端を避け、與えられた状況をそのまま受け入れる精神である。こうした白居易の生き方や文學觀は、元來「隱者の妻」「質素で清貧に甘んじ夫を敬う妻」「出世のために隱者のボーイズをとる士人の妻」という要素を含有した孟光故事とは重なる部分があり、それが、白居易が、人生のさまざまな場面で作つた詩に同故事を引用した一因だったのでないだろうか。そして、その度に、傳統的な孟光故事の要素は、彼の文學創作の場で融化され、夫の精神的支柱たりえる妻を表現するも

のになつたと思われる。

五 日本に傳來した孟光故事

1 平安期までの引用例

日本では、先ず、平安時代の『源氏物語』『帶木』の「雨夜の品定め」の段で「離婚」詩の「我、兩念を歌うを聴け」が引用されているが、ここには「荊釵」の言葉はなく、孟光自體にも焦點は當てられていない。ただ、他に「須磨」の光源氏の侘び住まいの縁が「香爐峯下、新たに山居を下し、草堂初めて成る、偶たま東壁に題す」詩の第二句、

石塔桂柱竹編牆 石増、桂柱竹牆を編む。

を典故としており、同詩第八句には「紙閣蘆簾孟光を著けん」があることを考慮すると、紫式部は少なくとも孟光については知っていたはずである。それにもかかわらず、孟光故事に焦點が當てられなかったのは、①『源氏物語』は源氏の妻（嫡妻・正妻）の座に坐り得る女性を次々と登場させては退けることで源氏の戀を語り、間接的に紫の上への愛情を語る構造で、孟光の持つ情癡の妻・苦樂を共にする清貧の精神が入り込みにくかつたこと、②平安時代の法律「戸婚律」は『萬葉集』卷十八にあるように、「妻ありて更に娶る者は徒一年。女家は杖一百」と定めていたが、實際は一夫一妻多妾制で、禁令は實質上の有名無實、妻の存在が強く意識される状況ではなかつたこと、などが考えられる。

次に、『唐物語』第四「孟光、夫の梁鴻によく仕ふ語」には、次のようにある。

むかし、梁鴻といふ人、孟光にあいぐしてとしごろすみけり。こ

の孟光、世にたぐひなくみえわろくて、これを見る人心をまどはしてさばくほどなりけれど、この夫をまたなきものにおもひて、かしづきうやまふこと思にもすぎたりけり。あさなゆうなにいゐかひとりて、けこのうつは物にもりつゝ、まゆのかみにさゝげてねんごろにすゝめければ、齊眉の禮とぞいまはいひつたへたる。「さもあらばあれたまのすがたもなにならず。ふたゝゝろなきいもがためには」心ざしだにあさからずは、たまのすがた、花のかたちならずともまことにくちかしからじかし。「されどもみく、からぬかほにはみかへにく、こそ。」

『唐物語』の成立は、仁平元年（一一五一）～文治四年（一一八八）と推測され、作者は現時点では藤原成範が有力視されている。ここでは、藤原の妻・清實に甘んじ夫を敬う妻の要素はなく、容姿に終始した内容で、容姿の負の部分、夫に仕えることで補う点が強調されている。

ところで、『唐物語』には、白居易の「琵琶引」「燕子樓」「長恨歌」「陵園妾」「李夫人」「上陽白髮人」を出典とした六話が収録されている。この内、新樂府三首について、これらは『源氏物語』にも取り入れられており、近藤春雄氏は、これらが好まれたのは議論のためではなく哀れな女の一生や愛する女を失って泣く男の心情に感じてのこと、と述べている。こうしたことから『唐物語』の作者の趣向と『源氏物語』の作者のそれとは近似しており、従って、孟光故事の内容も變質したのではないかと推測できる。

出典について、小林保治氏は、『後漢書』梁鴻傳とし、『唐物語』に定着した背景は『蒙求』の注釋世界との接点を想定するのが妥當、と述べている。『白氏文集』との関連性は言及されておらず、また、作

者の趣向が表面化した『唐物語』の孟光話を資料としてそれを判断することは困難だと思われるが、少なくとも、同書の『白氏文集』の受容傾向は、孟光故事傳承過程の一つの現象といえよう。

2 鎌倉期の引用例

鎌倉期になると、『蒙求和歌』『承久記』『十訓抄』に、孟光故事が消費の教訓話・理想の妻の比喩として引用され、定着していく過程を辿ることができる。

この時期には、嫁取婚による夫婦同居によって「家族」が成立し妻の理想像が形成されていった。中世の女性像は、具體的にいうと、妻問婚時代であった平安時代中頃の文人藤原明衡著『新猿樂記』で四十歳の「右衛門尉」の三人の妻に分擔されていた妻役劇（①夫より二十歳年上で権力と財産の後継となった母性を類型化した妻、②同い年で家政を類型化した妻、③十八歳で容姿美麗な性愛を類型化した妻）を、嫁取り婚の時代となり正妻が一人に限られるようになったことで、理想的、建前的には一人で兼ね具えることが求められた。また、鎌倉期の武士にとっては、その妻は、所領支配、軍役、縁坐いずれの面からも、夫婦一體観が形成され、夫とともに所領の成敗をし、互いに個を尊重した夫婦關係を成していた。

こうした中、孟光故事は、『蒙求』及び白居易の詩歌により、日本に受容されていったと考えられる。

先ず、『蒙求和歌』第五「孟光荊釵」には、次のようにある。

孟光容貌ハナハタミニクカリケレトモ。徳行コトニスクレタリキ。郷里オホクコレヲ聘トモ。タヤスクユルスコトナシ。卅ニナルトシ。父母イカナルイロヲカオモフトトヘハ。家マツシクトモ。コロサマ梁鴻カコトキノモノヲト云リ。サテ梁鴻ニアハセ

テケリ。ツ子ニオトロノカムサシ。ヌノ、裙ヲキテ。オノカミヲ
イヤシクシテ。梁橋カコトヲノミ、オモクオモヘリ。クヒモノヲ
ス、ムルニ。ツクエヲアクルコト齊肩。禮ヲナセリ。梁橋ヨヲス
サマシクオモヒトリテ。孟光ト、モ二霸陵山コモリキニケリ。

「とにかくに我思ふ筋にたかはねはをとるの神（髪）もさあ
はあれ」

『蒙求和歌』は、元久元年（一一〇四）、源光行が、古注『蒙求』本文
と注とに據つて、漢故事和歌を作ったものとされる。この第五「孟光
荊釵」については、「オトロノカムサシ」「ヌノ、裙」が『蒙求』古注
の「荊釵布裙」と一致している。

源光行は、治承四年（一一八〇）、正月の除目により民部大丞正六位
上に就任されたが、平家に加増した父の罪科の免許を請うため鎌倉
に下向して武家の政務を補佐し、幕府開設後は朝廷にも出仕、京極、
鎌倉間を行き來した。同書は、武家子弟に向けて、公家の教養を「假
字」に據つて習得させようと構想されたものであった。従つてこの頃
には「孟光」や「荊釵布裙」は既に消費に甘んじ夫を敬う教訓として
浸透していたことになる。

次に、慈光寺本『承久記』であるが、作者は未詳、承久の亂後間も
なく書かれ、現在の形になったのは寛喜二年（一二三〇）から仁治元
年（一二四〇）頃と考えられる。

本稿で取りあげるのは、源頼朝が、建久九年（一一九八）に相模川
橋完成の時に行われた橋供養の歸りに水神にとりつかれて病に臥し、
臨終の際に北條政子を孟光に喩えた場面である。

北條政子は、先に述べた『新猿樂記』に示された妻役劇の三類型を
兼ね備えた中世の正妻の理想、典型であることに加え、源頼朝の正

妻、武士政權最初の鎌倉幕府を開いた初代將軍の糟糠の妻であつた。
慈光寺本『承久記』には、後に政子が諸將を説得し幕府の結束をかた
める場面が出てくるが、瀕死の頼朝が政子を孟光に喩えた表現は、政
子の説得の効果の程を讀者に印象づける巧みな伏線ともなつていたの
ではないだろうか。武家社會に於ける彼女の存在を考える時、この引
用例は、日本の孟光故事研究にとって貴重な資料といえる。本文に曰
く、

建久九年戊午十二月下旬ノ比、相模川ニ橋供養ノ有シ時、藤間二
詣玉テ、下向ノ時ヨリ水神ニ領セラレテ、病患頻ニ催シテ、半月
ニ臥シ、心神疲頓シテ、命今ハ限ト見給フ時、孟光ヲ病床ニ語テ
曰ク「半月ニ沈ミ、君ニ僧老ヲ結ビテ後、多年ヲ送キ、今ハ同穴
ノ時ニ臨メリ」ト。

栃木高惟氏、日下力氏、益田宗氏、久保田準氏校注『保元物語・平治
物語・承久記』では、「孟光」を、「妻北條政子を指す」とし、「僧老」
も「同穴」も『詩經』に見える語とだけ注釋している。しかし、「僧
老」・「同穴」・妻の比喩としての「孟光」、という要素は全て白居易の
「贈内」詩にある。

更に言えば、慈光寺本『承久記』の中には『白氏文集』からの引用
例が他にもある。即ち、承久の亂で公武交渉（關東申次）にあたる西
園寺公經・實氏親子が關東に内通しているとの嫌疑で召し籠められた
時の描寫「朝ニ思フ蒙、夕ニ死ヲ給ケン唐人ノ様也。」が、白居易の
「太行路」詩（關雎詩・卷三）の

君不見、君見すや、
左納言、左納言、
右内史、右内史、

朝承恩、朝に恩を受け、
暮賜死。暮に死を賜う。

を踏まえているのである。先に挙げた板木高惟氏等による校注本では、この出典は『白氏文集』としている。であるならば、頼朝の孟光故事引用の場面についても、白居易の「贈内」詩の影響を考慮すべきではないか。

また、孟光と北條政子については、既に萩原さかえ氏の「慈光寺本『承久記』における政子呼稱に関する一考察」が発表されており、その詳細な考察は大いに参考になった。同論文では、

「孟光」という女性とは、夫のために自己を完全に抹殺し、あくまでも夫のために一途に献身した女性である。この「一途」さこそが、頼朝の妻政子に共通した姿勢ではなかったのか。妻としての理想像、それが「孟光」であった。この姿こそが、政子の姿に重層化して、慈光寺本作者をして「孟光」といわしめた所以ではないか。

とあり、孟光の出典としては、

「孟光」という女性に関しては『蒙求』という作品の中に傳記されている。

と述べ、他は『後漢書』梁鴻傳が引いてある。

しかし、筆者はこれまでの考察から、萩原論文のこの記述に對して二つの疑問を懐かざるを得なかった。まず第一に、慈光寺本『承久記』の作者が『蒙求』に影響されていたとすれば、『蒙求和歌』もわざわざ「オトロノカムサシ」「ヌノ、裙」と明記した「荊釵」や「布裙」という言葉が『承久記』で削られたのはなぜか。第二に、却って『蒙求』本文やその古注には片鱗もない「僧老」「同穴」が用いられた

のはなぜか。既に白居易の「贈内」詩の表現がある以上、これを偶然として看過することはできないのではないか。むしろ源頼朝が北條政子を孟光に喩えた箇所に直接的に影響した出典は、言語的に比較しても、慈光寺本『承久記』に他にも『白氏文集』からの出典があることを考えても、「贈内」詩とする方が自然ではないだろうか。また、同論文では、

その時代における「理想的妻」それが、孟光であり、政子であったといえるのではなからうか。まさに孟光なる呼稱は、政子に對する美稱の代名詞として、作者は記したと推測する次第である。

時代の要求にかなった生き方をした女性。

とも述べているが、北條政子については、①源頼朝との結婚の意義は、當時従来の地方官や本所・領家に頼れない地方の農民から武士が生まれ育つ中、家柄も良く由緒正しい頼朝が前代來の律令體系と繋がりを持つと同時に新しく興った農村武士の首領となり、貴族性と土豪性を調和させたこと、②頼朝はどちらかと言えば前者（貴族性）の色彩が濃く、またそれを好んだのであろうが、しかしあくまでも後者（土豪性）の性格を失わなかったところは北條時政・政子の存在があったこと、の二點、つまり古代政權と武家政權とを激突させないための緩衝地帯・潤滑油的役割をつとめたのがこの北條と頼朝の提携であって、その提携をさらに圓滑にさせたのが政子の存在であった、との見解がある。こうした時代背景に於ける役割を比較しても、北條政子が喩えられた孟光は、中唐期、貴族社會から官僚社會への移行期にやはり時代の潤滑油的役割を果たした白居易の妻のような唐代の孟光像に、より類似していると思われる。

そして何より、瀕死の頼朝が政子を孟光に喩えた慈光寺本『承久

記』の表現には、四文字の教訓話を羅列した『蒙求』からだけでは到底傳わらない夫婦の絆が感じられる。『承久記』の作者が孟光を引用したのは、教訓的要素に夫婦の情愛が融合した諷諭詩の「贈内」の表現がこの場面に最適だと判断したからではないだろうか。その他にも、當時の讀書状況からして『白氏文集』に親しんでいた作者が、白居易が妻を孟光に喩えた作品群から苦樂を共にした夫婦のエッセンスを汲み取っていた、とも考えられる。

ここで、日本に於ける諷諭詩の受容状況を示す一例を挙げておきたい。太田次男氏に據れば、北家内膳流の藤原氏で資宗という人物が底本を所有していたという『文集抄』は、『白氏文集』卷一、二という諷諭詩の本質が最も端的に表現された詩が集まる巻から集中的に抄出してあり、諷諭詩の根本精神は、平安時代の攝關政治下では概ね適宜はぐらかされ、中下級文人などは縦令これに氣付いていたにしても、多くは佛教などに頼りて本心が表面にでるようなことはまことに稀であったが、武家の世になると、これに對する京都側でも覺醒が起こり、觀念の上であるにせよ善政を目指し、ここにまともに諷諭詩が顧みられるようになった、という。『文集抄』には、「贈内」「贈婦」「青嫁」も含まれている。

最後に、『十訓抄』を取り上げる。成立は、自序によると建長四年（一二五二）で鎌倉幕府が開かれて五十年、承久の亂を経て、ようやく新體制が搖るぎ無いものとなる頃に當たる。作者論は、六波羅二鷹左衛門入道説と菅原爲長説とが對立している。

『十訓抄』は成立の二十年後にはすでに、京都の傳統的な文藝の感化を受けた鎌倉武士の愛讀書となる。その理由については、同書の説く處世的教訓内容と、北條重時の家訓といった當時の武家家訓との間

にあい通ずる所が存在したことや京都の王朝文化の鎌倉への浸潤が年を追うことに顯著になる動向の中、『十訓抄』がその保有する王朝貴族的知識・教養の啓蒙的性格のために、手頃な王朝文化入門書として評價されたから、という。第五「可憐朋友事」七本文に曰く、

そもそも、妹背のなからひは、偕老同穴のゆゑ有りて、ただうちある友にはなすべからず、妻を求むるには、上臈は品をもえらぶべし。つぎさまには、見目品をさきとすべからず、心をえらぶべきなり。もろこしの梁伯鸞が妻孟光は、形きはめて醜かりけれども、夫に仕へ隨ふ道、一心なかりけり。夫、世を遅れて、羅殿山に入りける時、ともにつき隨ひて、家の貧しきをもあなづらず、齊眉の禮までもねむころなるによつて、夫、志深かりけり。まことにその妻西施、南威をうつせりとも、夫を輕しめ、外心あらんは、かへりてあたとなるべし。何の益かあらん。秦中吟いはく、

富家女易嫁、嫁早輕其夫、
貧家女難嫁、嫁晚孝於姑。

などあれば、いみじく便りありても、夫のためなほざりならん女、よしなくこそ。

ここには、「偕老同穴」と清貧に甘んじ夫を教う精神が織り込まれているだけでなく、孟光の行跡に「羅殿」詩の戒めを直接繋げている。自序には、「今何となく、きゝ見るところの今昔の物語をたねとして」とあるので、孟光故事が白居易の諷諭詩と相まって、既に理想の妻、教訓として普遍的になっていたことが證明されよう。

まとめ

孟光故事の引用を比較・分析することによって、中国と日本で、以下のような類似現象が生じ、それぞれに孟光故事が變容していったことが明らかとなった。

中唐期と鎌倉期には、兩國で家を単位とした妻の存在がクロースアップされ、理想的妻像が形成された。中国では、孟光を題材とした女子教育が行われる中、士大夫も詩歌に妻を描くことを躊躇しなくなり、白居易の作品に代表されるように、孟光故事は、仕途を歩む夫の精神的支柱たり得る妻、いわば唐代の新しいタイプの孟光像となって詠出された。一方、日本では、鎌倉期に『蒙求』と『白氏文集』、就中、諷諭詩を通じて、教訓と夫婦の情愛が融合した孟光故事が受容され、北條政子の比喩として引用されるなど武家社會の理想の妻像となり、清貧に甘んじ夫を敬う教訓教材としても定着した。孟光故事のこうした現象は、平安時代はもとに受け止められなかった諷諭詩の根本精神が、武家の世に強く意識され顧みられるようになった具體的一例と考えられるのである。

注

本稿に引用した白居易の詩と巻数は『白氏文集』（四部叢刊初編集部）、作品の創作時期は朱金城氏著『白居易集箋校』（上海古籍出版社）に據り、岡村繁氏著『白氏文集』巻三、四（明治書院出版）を参考とした。その他の詩は『全唐詩』（中華書局）に據った。日本文學關係の引用は、小林保治氏著『唐物語全釋』（『讀群書類從』）『蒙求和歌』、橋本高惟氏、日下力氏、益田宗氏、久保田華氏校注『保元物語・平治物語・承久記』、淺見和彦氏校注・譯『十訓抄』に據った。また、北京大學中文系李鐸氏「全唐詩電子檢

索系統」<http://chinese.pku.edu.cn/cgi-bin/taofangshu/cse/>、東吳中文研究院陳郁夫氏「蒙求」<http://210.69.170.100/25/cv.htm>、臺灣中央研究院「漢語電子文獻」<http://www.sinica.edu.tw/finis-bn/finisweb3/各データー>へースも利用した。

(1) 拙著『晚唐詩人考—李商隱・溫庭筠・杜牧の比較と考察—』所收附論「唐代の新孟光考」（中國書店一九九八年出版）

(2) 太田次男氏著『書鈔本を中心とする白氏文集本文の研究』中巻（勉誠出版一九九七年出版）、「白氏文集選抄本諸本」（3）國立國會圖書館藏『文集抄』第二〇七頁～二二〇頁。また、近藤春雄氏著『白氏文集と國文學—新樂府・秦中吟の研究』（明治書院一九九〇年出版）にも「諷諭詩の精神が反省され、強く意識されて來たのは、鎌倉以後」とある。第二五頁

(3) 下見隆雄氏著『儒教社會と母性—母性の威力の顯現でみる漢魏晉中國女性史』（研文出版一九九四年版）「後漢時代における離逸者の妻の意味するもの」第一六三～一六四頁。梁鴻と孟光については、西晉皇甫謐著『列女傳』にも傳記があり、逸文「梁鴻之妻孟光醜黑而肥力能舉石臼」（『重校說郛』第五八）が残っている。また、『古列女傳』卷八「續列女傳」梁鴻妻、袁安著『後漢紀』第十一、「東觀漢記」にも記述がある。他、「太平御覽」卷七二八引には「列女傳」「荊釵布裙」とある（下見氏同書第一六一～一六二參照）。

(4) 陳顯遠氏著『中國婚姻史』（上海文藝出版社一九八七年出版）には「爲關於男子方面重婚罪之制定唐律戶婚」諸有妻更娶妻者、徒一年、女家減一等、若欺妄而娶者、徒一年半、女家不坐、各離之。」疏議謂依禮、日見於甲、月見於庚、象夫婦之儀、一與之齊、中饋斯重、故更娶者、合徒一年。（第五二頁）とあり、蘇冰氏、魏林氏著『中國婚姻史』（文津出版）には「秦漢時代形成一夫一妻（多妻）的婚姻結構模式、在魏晉以後曾不像原先那樣有約束力。進入統一的和平時期後、唐中央政府

府以法律手段重申正統規範。」(第一八九頁)とある。また、雷良波氏、陳陽鳳氏、熊賢軍氏著『中國女子教史』(武漢出版社一九九三年出版)には「隋唐是中國封建社會繁榮昌盛時期。這個時期國勢強盛，學術昌明，文明開放，在政治、經濟、文化、教育諸方面，均取得了巨大成就，生產的發展，經濟的繁榮，政治的清明，國家的統一，以及較長時期的穩定，使整個社會民心振奮，精神昂揚，婦女教育問題引起全社會的關注。因之，女子教育理論較前有較大發展，女子在社會中的地位也有回昇。」とある。第七二頁

- (5) 趙翼著『二十二史劄記』には「五代修唐書，雖史籍已散失。然代宗以前尙有紀傳。」とあり、皇帝の實錄を基にした『舊唐書』には唐王朝の影響が色濃く反映していたと考えられる。また、山崎正博氏著『舊唐書』の「列女傳」と『宋史』の「列女傳」(『宮崎大學教育學部紀要』第二九)には「王朝の滅亡後、原則的に次代の王朝によって編纂される『正史』は、滅亡した王朝の記録の一部であると同時に、編纂に当たった王朝の新しい支配論理の形成に参考とされるもの、という二重の性格をもつものであり、特に各篇の「序文」に盛られた思想や方針は、そのうちの後者の性格を理解する鍵として、決して見逃されてはならないものである。」ともあり、孟光顯彰の傾向は唐書を経て五代まで傳えられたと考えられる。付け加えると、先に挙げた『舊唐書』も編纂は唐代太宗の頃なので、同書「列女傳」は唐代の記録を傳えるものであるとともに、唐の朝廷が孟光を模範的女性像と認識していた資料ともいえよう。但し、『舊唐書』「列女傳」には前述したように當時の具體例が明記されているのに、『舊唐書』には、後述するように具體例はなく、序文と各傳の間に懸隔を生じているのである。

- (6) これは當時の風潮として、傳奇小説にも描かれている。例えば、『枕中記』(『文苑英華』卷八三三)には書生が夢の中で出世をしていく第一段階として「數月、娶清河崔氏女。女容甚麗，生資愈厚。生大悅。由

是衣裝服，日益鮮盛。」と、書生の五人の息子の婚姻も「其姻媾皆天下望族。」とある。『霍小玉傳』(『太平廣記』卷四八七)には李益の母が進めていた婚姻が「盧亦甲族也。」という家柄の娘であり、やがて復讐をする小玉も李益の婚姻については、當初「以君才地名，人多景慕，願結婚姻，固亦衆矣。君之此去，必就佳姻。」といっている。『李娃傳』(『太平廣記』卷四八四)でも李娃が直言「崔科の試験に合格して赴任することになった若者に「君當結縭，以奉蒸嘗。中外婚姻，無自願也。」といっている。

- (7) 中原健二氏著「詩人と妻—中唐士大夫意識の一断面」(『中國文學報』第四七)

- (8) 平岡武夫氏著『白居易—生涯と歳時記—』(朋友書店一九九八年出版) 第二部「白居易の家族」に「白氏は家族である。楊氏はとにかくにも大族である。」第一五七頁、「白居易は楊氏の女を娶って、名族と姻戚になったのである。」とある。第一七〇頁

- (9) 中晚唐期に孟光を妻に喩えた例は、元稹「望賢堂」、權輿「征役江西、路上以詩代書寄內」(「中書夜直寄內」(「中書送勅賜賚諫諍」、賈至「初入諫司馬家室至」、李紳「總輪苑遺應擢四十六韻」、皮日休「臨頓宅將有歸于之日魯望以詩見貺因抒懷酬之」、徐夔「人事」(「綠髮」、劉兼「江樓望鄉寄內」(「偶聞官吏舉請願有一篇寄從弟舍人」、楊堅志「送妻」、何北士人「代表答詩」、李商隱「重祭外舅司徒公文」などがある。

- (10) 唐時に引用された列女には、他に、貴賤に甘んじたという野妻の妻(元稹「連理樹三首」其一、白居易「贈內」(「贈內子」、李肇「唐書食日寄楊東川」、曹鄴「不可見」などに引用されている)。鮑宣の妻少卿(皮日休「臨頓宅將有歸于之日魯望以詩見貺因抒懷酬之」、陳子昂「贈鄭山人」(「白居易「贈內」(「秋晚」(「陶潛の妻翟氏(白居易「贈內」)がある。(范之麟氏、吳廣舜氏主編『全唐詩典故辭典』湖北辭書出版社一九

八九年出版参照

- (11) 川合康三氏著『終南山の樂容 中唐文學論集』所收「白居易閑適詩攷」(研文出版一九九九年出版) 第四一三、三七七頁
- (12) 養老冰氏著「贈内侍の流れと元稹」(『中國文學報』第五九卷)
- (13) 吉川忠夫氏著「白居易における仕と隱」(『白居易研究講座第一卷 白居易の文學と人生』勉誠社一九九七年出版所収) 第二〇六頁、二二二頁
- (14) この場面の「羅縵」は、パロディ(いかに女と別れるかという話)としての話を形成するために露骨に持ち出された、という。(藤井貞和氏著「白居易研究講座第四卷 日本における受容(散文篇)」所収「藤氏物語を中心に」第十五、十六頁)
- (15) 工藤重矩氏著『平安朝の結婚制度と文學』(風間書房一九九八年出版) 第六、六七、一九二頁
- (16) 近藤春雄氏の説は注2同書、第二〇、二三頁。小林保治氏編著『唐物語全釋』(笠間書院一九九八年出版)では、この孟光の話は、孟光の容貌自體が問題とされ、内面(心)の外(容姿)に對する優位性を説く教訓的な話となっている、という。また、『唐物語』本文中の「齊眉の禮」について、小林氏注には、安居院の唱道書である『言泉集』(三二)に「齊眉注蒙求云列女傳孟光梁鴻之妻每進食常舉齊眉」とあり、『蒙求』注の世界を通してこの言葉が定着していた様子を窺わせ、『蒙求和歌』にも講がるものといえること、更に、『言泉集』(三一)「亡夫帖」に收められた「德大寺左府子息中将周忌作著」と題された文からの抜き書きに「齊眉之禮始顯 同心之交新至 琴瑟之調无違 鶼鶒之眠不驚 期僧老於千秋之初 契同穴於萬歲之後」とあるのは、その具體例として注目できること、などを述べている。しかし、『言泉集』(『初中榮編東大寺北林院本古典文庫』)「亡夫帖」には、『白氏文集』から引用した「比翼連理文集長恨歌曰七月七日今長」、「燕子樓」の記述がある

孟光故事の變容

- こと、『言泉集』にある鶼鶒・仲老・同穴の言葉は『蒙求』本文や古注にも無く、『白氏文集』にはあることなどから、『白氏文集』の存在も考慮すべきではないだろうか。
- (17) 脇田晴子氏著「中世に生きる女たち」(岩波新書一九九五年出版) 第二九頁、二四〇、二四五頁
- (18) 脇田晴子氏著「日本中世の女性」(吉川弘文館一九八七年出版) 第十八、二〇頁
- (19) 『蒙求』が日本に渡来したのは早くは奈良朝から遅くとも弘仁年間(八一〇～八二二)。白居易の時は承和年間(八三四～八四七)前後に渡来、『日本國見在書目錄』に據ると『白氏文集』七十卷本が流布していた。
- (20) 柳瀬喜代志氏著「日中古典文學論考」(汲古書院一九九九年出版) 第五〇九、五一頁。
- (21) 注20に同じ。第五〇五、五〇六頁
- (22) 北川忠彦氏編『軍記物の系譜』(世界思想社一九八五年出版) 第一一四頁
- (23) 注18に同じ。第七二頁
- (24) 『保元物語・平治物語・承久記』(岩波書店一九九二年出版) 第三〇三頁
- (25) 『胸澤圖文』第四三號
- (26) 渡邊保氏著「北條政子」(吉川弘文館一九九七年出版) 第二四、二五頁
- (27) 注2に同じ。
- (28) 注27に同じ。また、抄出者に擬せられるべき資格を持つ者には、後三條天皇(一〇三三～一〇七三)・白河天皇(一〇五三～一一二九)時に侍讀奉仕の實績がある實政、高倉天皇(一一六一～一一八二)・後鳥羽天皇(一一八〇～一二三九)時に侍讀奉仕の實績がある兼光、鳥羽

天皇（一一〇三—一一五六）・崇徳天皇（一一一九—一二六四）時に侍讀奉仕の實績がある實光、が考えられる、という。

- (29) 福島尚氏著『十訓抄』——作品研究のための瀧ふみ——（本多義憲氏、池上洵一氏、小峯和明氏、森正人氏、阿部泰郎氏編集『説話の世界Ⅱ——中世——』所収（勉誠社一九九三年出版）第三八六頁）

- (30) 池田利夫氏著『日中比較文學の基礎研究』第九章「翻譯説話の役割」（笠間書院一九八八年出版）では、「十訓抄に蒙求だねの話が少ないわけではない。」「孟光莉銀」、「梁鴻五噫」がある。」（第三八八頁）とあり、瀧見和彦氏校注・譯『十訓抄』（小學館一九九七年出版）では「偈老同穴」の出典はなく、「唐の梁伯鸞が妻孟光」の出典は『後漢書』「齊眉之禮」の出典は『蒙求和歌』、「秦中吟」の出典は『白氏文集』としてある。第一九二—一九三頁

- (31) 貧賤に耐えた女性としては、他に、卓文君が『唐物語』『蒙求和歌』『十抄訓』に引かれ、『蒙求和歌』は「貧シキコトヲ愁ヘズ、二心ナカリケリ」と清貧の精神が強調され孟光故事引用例と連動している。